

〔解説〕 平定廓爾喀戰圖

高田時雄

廓爾喀^{ゴルカ}とは現在のネパールである。ネパールではマッラ朝以來數世紀の長きにわたってカトマンドウ、パタン、バドガオン（バクタプル）という三つの小王国が併立、互いに牽制し合っていた。ところが18世紀の半ば頃に、ゴルカ出身のプリトウビ・ナラヤン・シャー（1723-1775）が巍然頭角をあらわし、やがてカトマンドウを席卷、パタンを制壓、さらに1769年には最後に残ったバドガオンを陥落させると、ここにマッラ王朝は名實ともに消滅して、新たにシャー王朝（シャハ王朝）が成立した。その發源地にちなんで、これをゴルカ王朝ともいう。中國ではそれまでネパールを巴勒布^{バルボ}と稱していた。これはチベットで傳統的に隣國ネパールを指す語 bal po の音譯である。しかし新王朝が成立すると、中國でもネパールをゴルカ¹と呼ぶことになったのである。

ゴルカの戦争はこの新興王朝が餘勢を驅って隣國のチベットに侵攻したため、宗主國たる清朝がチベットを援けて出兵したという事件で、乾隆五十三年（1788）から五十八年（1793）にかけ、前後して二回の戦争が行われた。戦圖はそのうち第二次のゴルカ戦争を描いたものだが、この二つの戦役は一連のものなので、順序としてはやはりそもそもの始めから戦争に至る背景を見ておく必要がある²。

¹日本では英語 Gurkha に由来するグルカという呼稱が廣く行われているが、小文では原音に近いゴルカを用いる。漢字表記「廓爾喀」もどちらかと言えばこちらに近い。

²ゴルカ戦争については、魏源『聖武記』巻五に収める「乾隆征廓爾喀記」が簡明で大凡の経緯を知るのによく、『欽定巴勒布紀略』『欽定廓爾喀紀略』の二書には清朝側の關係史料が網羅されている。また莊吉發『清高宗十全武功研究』（1982年、臺北：國立故宮博物院）の第八章「邊界商務糾紛與廓爾喀之役」（417-487頁）が故宮の檔案を用いた研究として大いに参考になるほか、佐藤長『中世チベット史研究』（1986年、京都：同朋舎）の第十二「第一次グルカ戦争について」（521-596頁）、第十三「第二次グルカ戦争について」（597-740頁）の記述がもっとも詳しく、小文でも大いに利用させていただいた。また近年の中國でも「第一次廓藏戦争（1788-1789）中的議和潛流」（『中國藏學』2007年第1期、38-50頁）、「乾隆朝第二次廓爾喀之役（1791-1792）」（『中國藏學』2007年第4期、33-50頁）、「1789-1790年鄂輝等西藏事宜章程」（『中國藏學』2008年第3期、138-146頁）など一連の論文を相繼いで公刊した鄧銳齡氏の研究が注目される。Deng Ruiling, Several Questions Concerning the Gurkha's Second Invasion of Tibet (1791-1792), *China Tibetology*, No.2, September 2010, pp.11-32 は、上記鄧氏第二論文の英語版である。

第一次ゴルカ戦争の顛末

さてゴルカは乾隆五十三年（1788）六月に至って、突然にキロン（濟隴 skyid-grong）³、ニヤラム（聶拉木 gnya'-lam）⁴など邊境地帯に侵攻してきた。ゴルカは、これまでネパール・チベット間の交易に用いられてきた銀錢に代えて新鑄の銀錢を通用させたい、については新錢一文を舊錢二文のレートで交換することとしたいという提案をダライラマに行ったが、チベット側からは一向にその返答がなく誠意が見られないというのが、ゴルカの主張する侵攻の理由であった。

そもそもチベットにおける通商貿易の相手は中國本土よりも、むしろインドであった。インドの商品は、ネパールあるいはブータンを経由する二つのルートによってチベットにもたらされ、この兩國は中繼貿易によって利益を得ていた。そして交易に用いられた貨幣はチベットで産出する銀を用いたネパールの貨幣であった。しかるにゴルカによるネパール征服戦争のためにインド・チベット間の貿易は深刻な不振に陥る一方で、ゴルカとしても膨れあがった軍隊を維持していくために貿易の再興が焦眉の急であった。そのため新興のゴルカ王朝は新たな貨幣を鑄造して、舊貨幣の切り下げを行うとともに、關税を大幅に引き上げた。さらにあわよくばインド・チベット間の交易をネパール一路に限定し、利益を獨占しようというのである。

その戦略をリードしたのは、なお幼年の國王ラナバハドウルシャー（Rana bahadur shah）の攝政であった叔父のバハドウルシャー（Bahadur shah, ?-1792）であった。また彼のチベット戦略の顧問のような立場にいたのが、當時チベットを離れネパールに流寓していたシャマルパ（沙瑪爾巴 Zhwa-dmar-pa, 1733-1791）である。シャマルパは第三世パンチェンラマ⁵の弟で、カルマ・カギユ赤帽派の活佛であった。同じく第三世パンチェンの兄弟であるチュンパホトクト（仲巴呼圖克圖）がタシルンポ（シガツェ近郊にあり、パンチェンが座首をつとめるゲルク派の大本山）のチャンゾエパ（商卓特巴 phyag-mdzod-pa）（財政を主管する役職）となって、豊かな暮らしを享受している一方、弟の自分は全くパンチェンの遺産に與ることができないという私怨が、シャマルパをしてゴルカのチベット侵攻を使嗾したのだとも言われる⁶。もちろんこれが戦争の主たる原因ではないが、シャマルパがチベット情報を色々と提供していたことは事實であろう。またニヤラム等の國境地帯で、現地のデバ

³シガツェの西南に位置し、現在の吉隆縣吉隆鎮に當たる。ちなみに現在の吉隆縣の政府はさらに北方の宗嘎鎮、清代の宗喀（Rdzong-dga'）に置かれている。

⁴シガツェの南方、現在の聶拉木縣。

⁵パンチェンラマの最初の三代は後に追贈されたもので、それを含めて数えると第六世パンチェンラマとなる人物。Blo-bzang Gpal-Idan Ye-shes, 1742-1793。

⁶佐藤長『中世チベット史研究』、535-6頁。

(第巴 sde-pa) (チベット地方政府の長) たちが私的に高額の税を課していたことも、ネパール商人の怨嗟の的となっており、同じく國境で取引されるチベットの鹽が沙土の混入した品質の劣るものであったなどというのも、ネパール側の感情的な不満を醸成する一因となっていたのである。

ゴルカが國境を越えて侵入してきたのを受けて、チベットでも防戦に努めたことは勿論である。ゴルカの進入路は二つ、ニヤラムからティンリ (定日 Ding-ri) を経てシェルカル (脅噶爾 Shel-dkar) に向かう路線と、今一つはキロンから入りゾンガを抜けてツァンポ河を越え、サガー (薩喀 Sa-dga') を目指す道である。駐藏大臣の慶林は綠營兵に加えて現地のチベット兵を驅り集めて防衛に当たらせる一方、四川總督に對して援軍を要請した。七月二十七日、駐藏大臣の奏上によってゴルカ侵攻の報に接するや、熱河の離宮にあった乾隆は早速成都將軍鄂輝に命じて、裡塘、巴塘、^{リタン} ^{パタン} ^{デル} ^ゲ 德爾格爾⁷の番衆を率いてチベットに向かわせた。鄂輝は臺灣の戰場から凱旋し、偶々當時熱河にあって直接乾隆の命を受けたのである。乾隆はまた駐藏大臣に命じて、ゴルカに對し「大兵が全て至らば、爾^{なんじ}の部落は須臾にして盡く滅び、彼の時に恐懼して撤兵を哀懇すとも、勢いまた中止する能わざる」ことを伝えさせた⁸。さらにチベットに通じるもう一方のルートである青海方面にも指示して要衝を固めさせた。

チベットでは二人の駐藏大臣のうち慶林が戦況を視察するため、タシルンポに到着していた。ニヤラムから前進したゴルカ兵は、ランコル (第哩朗古 Ding-ri Glang-'khor)、ティンリを経由してシェルカルを包圍、チベット軍は一旦これを撃退したものの、力盡きて後退を餘儀なくされた。またキロンから入ったゴルカ兵も進んでゾンガを奪取した。慶林は戦いの推移を見るに、敵はやがてタシルンポまで進出することもあり得ると判断し、チュンパホトクトと圖ってパンチェンラマをラサへ移すことを決意した。ラサではいま一人の駐藏大臣雅滿泰が懸命に兵力の動員に当たっていたが、思うようには進捗していなかったのである。やがてパンチェンは七月二十八日にタシルンポを出發し、九月四日にラサに着き、ポタラ宮でダライラマに迎えられた。

鄂輝は八月二十四日に成都に到着、九月八日には打箭爐に着き、十一日に軍を率いて出發した。また先行していた四川提督成徳の軍もまもなくチベットに到着するはずである。しかし駐藏大臣の慶林、雅滿泰の消極的な對應に不信感を募らせている乾隆は、それでも心許ないと思ったか、九月九日、侍衛の巴忠を総指揮官としてチベットに派遣する命を下した。巴忠はチベット語にも通じた人物で、チ

⁷ 『高宗實録』『欽定巴勒布紀略』に引く上諭では確かにこのように書いてあるが、最後の「爾」は不要で、削ったほうが好いように思われる。待考。

⁸ 『欽定巴勒布紀略』(西藏學漢文文獻匯刻第一輯、北京、1992年)、38頁。

ベット政府とも意志の疎通が容易であろう。

九月一日、慶林と交替するようなかたちで今度は雅滿泰がタシルンポに到着した。その前にゴルカ兵はシェルカルを放棄し、やや西方に退却していた。しかしゾンガ方面の敵は、ツァンボ河を渡ってサガーに押し寄せつつあるなど、情勢は豫断を許さないものがあつた。しかるに八月の末から九月の始めにかけて、意外にもゴルカ兵は二つの戦線から續々退却していったのである。雅滿泰には事情がよく飲み込めなかつたが、九月十一日に至ってシェルカルからの報告により、ようやく事態が明白となつた。サキャホトクトとタシルンポの使者がゴルカの陣營に行き、和平交渉を進めているというのである。まもなく四川から成徳の軍が前線に到着しようとするこの時に、駐藏大臣に何らの相談もなくゴルカと媾和しようというのは、一體いかなることであろうか。タシルンポのチュンパホトクトに問い合わせたところ、サキャホトクトの提案だという。いずれにせよダライラマにも何ら相談なく媾和を進めるというのは、ほとんど考えられない事態と言わねばならない。

ともあれゴルカの軍營からは媾和の條件が纏まるのであれば、前向きに考える旨の返事があり、その知らせはラサに歸還途上の雅滿泰にもたらされた。雅滿泰は九月二十日にラサに歸るや、慶林及びパンディタ（公班底達 Dga'-bzhi-ba Paṇḍita Rngos-grub rnam-rgyal⁹）と相談した。パンディタは媾和に積極的で、乾隆四十年にデモホトクト（第穆呼圖克圖）が攝政であつた時、ネパールが侵入してきたが、その時に締結した條約があるので、今回もそれと同様に處理すればどうかという。ダライもそれに同意し、ケンポ・チョエペルサン（珠巴勒桑 Chos dpal-bzang）一行をニヤラムに派遣することとなつた。使者は九月二十一日にラサを出發した。

成徳は使者が出發した翌日、九月二十二日に一千の兵を率いてラサに着くと、早速慶林に對しこれまでの媾和交渉の経過がいかにも穩當を缺くことを指摘し、ダライにも面談して媾和使節のチョエペルサンを途中から呼び戻すこととした。その上で準備萬端を整え、十月八日シェルカルに向かつたが、その進軍の速度は乾隆の目にはすこぶる緩慢に思われた。一方、鄂輝も十一月五日にラサに到着、ダライらに面會して、軍の目的がチベットの保護にあり、ゴルカをして再び侵入させないためであることを説いた後、十一月二十二日にはタシルンポに着いた。さらに欽差大臣の巴忠が早くも十一月二十八日にラサに到着して、ポタラにおいてダライ、パンディタ、雅滿泰に會い、乾隆の意向を傳えた。雅滿泰には特に旨を承けて戒告を與えたところ、雅滿泰は「ひたすら惶悚（恐れ入つて）、地に伏して立ち上がれない」¹⁰ほどであつた。いずれにせよこれで清軍の指揮系統は整つた譯である。

⁹先代すなわち第七世ダライラマの大論で、退任した後も政界に大きな發言力を行使していた。

¹⁰『欽定巴勒布紀略』、222頁。

慶林、雅滿泰は駐藏大臣を罷免、降格された。後任の駐藏大臣には舒濂が任命されたが、彼がラサに着任するまでは駐藏大臣の印綬は巴忠が預かることになった。

先着の成徳はランコルに陣營を構えていたが、十二月の十日前後にはそこへ鄂輝が合流し、先ずゾンガを攻略、その後キロン、ニヤラムに進む作戦が立案された。巴忠も十九日にはシェルカルに到着し、この作戦を承認した。すでに一帯は雪の季節に入っているが、明けて乾隆五十四年正月十三日にはゾンガが首尾よく清軍の手に落ちた。しかしその後は積雪に阻まれ、もはや更なる前進は困難な局面に立ち至った。ゴルカにまで攻め入って、徹底的打撃を與え、降伏させずにはおかないという乾隆の決心は、ここに来てやや揺らいだかに見える。融雪を待つて前線に軍を留めるとすれば、それなりの犠牲を覚悟しなければなるまい。ニヤラム、キロンを落とすことは果たしてそれだけの犠牲に見合う価値があるであろうか。乾隆は、巴忠に指示して、現地軍の判断として撤兵を許可した。また一方でカロン (bka'-blon) (チベット政府の大臣) を敵方に遣り、官軍は雪のために一旦兵を引くが、再び侵入するようなことがあれば、徹底的に覆滅するであろうと伝えさせた。

二月下旬になって清軍が國境地帯に人を送って、ゴルカ側との接觸を試みたところ、先にサキャホトクト等が和平交渉のために派遣した二人のラマが現れ、ゴルカ側の願いを伝えてきた。そこで鄂輝等はこの二人のラマに先導させて総兵の張芝元、穆克登阿、カロンのテンジンペンジョル (丹金班珠爾 Bstan-'dzin-dpal-'byor)¹¹、ペンデントンチュプ (巴勒丹敦珠克 Dpal-ldan-don-grub)¹²、デボン (チベットの軍指揮官) のペツェル (戴繡巴載 Mda'-dpon Pad-tshal) をネパール領内に送り、事情を聴取した上、敵の頭目に「匍匐來營、輸誠歸服」¹³するように伝えさせた。

ラサに歸っていた巴忠は三月七日に再び出發し、十六日にシェルカル、二十八日にはキロンに到着、鄂輝、成徳と會同し、善後策を話し合った。そうこうするうちにゴルカの大頭目カダンバムサヒ (噶登嘛撒海 Kadan bam sahi) とハリウパドヤ (海哈哩烏巴第哇 Hari upadhyā) が鄂輝の陣營に到着し、正式に降伏を申し入れた。ゴルカ側としては、以前に横暴な課税によって苦しめられていたチベットの官吏はすでに英明なる大皇帝によって處罰され、駐藏大臣も更迭され、問題はすでに除去されたので、媾和に應じたいというものであった。かくして第一次ゴルカ戦争は実際にはほとんど干戈を交えることなく収束したのである。しかし實はゴルカとチベット間の和平にはきわめて不自然な驚くべき密約が隠されており、やがて兩國のあいだに更なる緊張がもたらされることになる。

¹¹パンディタ (公班底達) の子。

¹²パンチェンの父。

¹³『欽定巴勒布紀略』、274 頁。

密約と巴忠の自殺

上述したようにゴルカは前非を悔いて清朝の軍門に降ったのであるが、實はその前にチベットとゴルカの間に、全く別個の和平交渉が隠密裏に行われていた。チベットに流寓し様々な畫策を行っていたシャマルパのことは先に觸れたが、そのシャマルパの仲介によって、テンジンペンジョルたちチベット政府の高官は獨自にゴルカと交渉を進め、銀兩の提供によってゴルカ占領地の返還を求めたのである。その条件はチベット側が毎年元寶三百個、計一萬五千兩をゴルカに支拂うというものであった。支拂いは乾隆五十四年から始めるものとされ、テンジンペンジョルは何とか元寶を工面してゴルカ側に手渡した。そういった密約があった後に、ゴルカの大頭人カダンバムサヒとハリウパドヤが降伏してきたという譯である。思えばゴルカ側にしてみれば、自分たちは今回の戦争でチベットに敗北したわけではない。確かに清朝の大軍は大いなる脅威ではある。しかし戦はやってみなければ分からないではないか。戦わずして兵を引いたのは、チベット側から銀兩の支拂いという代價を引き出したればこそその撤退だったのである。

しかし、前もって何ら清朝側と打ち合わせることもなく、チベット政府がこのような密約をゴルカと交わすなどということが一體あり得ようか。後に第二次戦争が勃發した後、乾隆が派遣した欽差大臣福康安が調査したところによれば、この密約の首謀者はほかならぬ巴忠だということが次第に明らかになってきた。

巴忠は今回の戦争の原因の一つはチベット官吏の過酷な收奪にあり、ゴルカの掃討も本來はチベット政府が責任を負うべきものである。しかしチベット軍には何らの軍事的能力もないからには、ゴルカ兵を早期に國境地帯から追い拂うためには、チベットがゴルカに賠償金を支拂うのが最も容易な解決策であろう。萬一、惡天候を押しして戦争を續行し、ゴルカの本據まで進撃するという事になれば、清軍の現有兵力では不十分であり、兵站もすこぶる困難が豫想される。その成否は當然すべて自らが負わねばならない。そういった条件を様々に衡量しつつ、巴忠は銀兩による解決をテンジンペンジョルに示唆したのである。そうせよと指示したのではない。一切はチベット政府の責任において爲される事柄である。ただその賠償金は豫想を超えた巨額にのぼり、チベットの財政を壓迫することとなり、やがて破綻を來すことになるのだが、當面は終戦によって短い平和がもたらされた。ことの顛末はやがて鄂輝と成徳の耳にも入ったであろう。彼らが雙手を舉げて賛成したとは思われない。しかし彼らも巴忠によって説得され、口を噤むことになった。

ゴルカは正式に謝罪使を北京に送り、乾隆五十五年（1790）正月元旦の賀宴において、ラナバハドウルシャーは正式にゴルカの王として册封され、叔父のバハドウルシャーにも公爵が授けられた。ゴルカの使者がカトマンドゥに歸り着いた

のはこの年の八月であった。これで一件落着かと思われた。しかしチベットに押しつけられた過大な債務はやがて履行不可能となる。

乾隆五十六年（1791）五月、チベット政府は銀兩の不拂い問題の解決のために、テンジンペンジョル等四名をニヤラム方面に向かわせることになり、一行は六月六日にニヤラムに到着、先方に會談を申し入れた。六月二十八日にシャマルパから返信があり、それにはさらに南方のチャクサム（卓克沙木 Lcags-zam）で會談したいと書かれてあった。ところが七月六日の夕刻にゴルカの頭人一名が七十餘名を引き連れてニヤラムに來たり、翌朝には千餘のゴルカ兵がニヤラムに向かってきた。敵の数が多くて押しとどめることができないために、川に架かった橋を打ち壊したところ、ゴルカ側では退路を斷たれたと思い、發砲したために、チベット兵と交戦する事態となった。衆寡敵せず、ニヤラムはゴルカに占領され、テンジンペンジョル等十一名とその従者はゴルカの捕虜となってしまった。

いかにも突然の事件のようにも思われるが、それには伏線がなくはない。乾隆十五年の十月、ゴルカはスベダル・トゥララム（蘇必達多喇拉木 Subedar Tularam）等をダライのもとに派遣して來た。彼らの目的は、先ず先に大皇帝が下された恩に報いるために北京に行って謝恩したいというものである。天朝より既に封號を與えられたからには、食俸と領地とを下賜されるはずで、その請願を行いたいということなのだが、これは例のシャマルパの示唆によるものであったらしい。使者は駐藏大臣の普福に會って請願したが、そのようなことが認められるはずもなく、北京への朝貢には然るべき資格がなければならぬと、これも許されなかった。またトゥララムたちのもう一つの任務は銀錢の交換比率の問題に目處をつけることであって、これは先の戦争の主たる原因であっただけに、一層重要な問題であった。ゴルカ側の要求は相変わらず新錢一に對して舊錢二と交換するというもので、その比率をチベット側に受け入れさせることを命ぜられていた。そのためにご丁寧にも數駄の銀錢を運んできていた。ところがカロンのテンジンペンジョルは、條約で定められたのは新錢一個は舊錢一個半だったはずだとして、承諾しなかった。このようにトゥララム一行は何ら得るところなく歸國せざるを得なかった。ゴルカ側に強硬路線を選択させた原因の一つはここにあったと見られる。

さてニヤラムで起こった衝突の後、ゴルカ兵はキロンにも侵攻、ここを占領し、七月二十九日にはゾンガに來襲、八月二日には城砦が包圍され、その後十日餘り一進一退の攻防が行われた結果、敵はようやくキロン一帯に退却した。しかしニヤラムから侵攻したゴルカ兵一千餘名は、八月三日頃にはティンリに進撃し、やがてここを占據した。チベット軍はシェルカルまで退却を餘儀なくされた。こういったゴルカの攻勢を受けて、その時駐藏大臣であった保泰は七月二十六日にラサを

出發、八月三日にタシルンポに着いた。そこで援軍要請を受けた彼は、急遽前後藏のチベット兵九百餘を集め、シェルカルに向かわせた。しかしゴルカ兵はシェルカルを迂回し、更に東方のチュンドウエ（春隊 Chu-'dus）方面に押し寄せてきた。戦闘が行われたが、ゴルカの兵数は多く、チベット兵はチュンドウエから退却した。勢いに乗るゴルカ兵はさらに前進を続け、八月十六日にはサキヤが占領された。その様子を見て、保泰はタシルンポも危ういと判断し、パンチェンをラサに移すことにした。タシルンポにはチュンパホトクトを留め、萬一タシルンポが陥落するようなことになれば、チュンパをラサへ移送せよと命じ、保泰はパンチェンに随従して八月二十五日にラサに到着し、駐藏大臣に再任されていた雅滿泰と善後策を協議した。益々近づいてくる敵を前にして、二人はダライとパンチェンに四川西邊のガルタル（泰寧 Mgarñthar）へ遷ることを提案したが、ダライはそれを受け入れず、チョカンの樓上から集まった群衆に向かって、ゴルカはラサまで来ない、自分はラサを離れる意志のないことを告げ、各々生業に勵むように諭した。

保泰は八月十六日にすでに四川、雲南など内地からの援軍を請い、チャムドの番兵もウイに派遣するように上奏していたが、後藏都司（都司は綠營の武官、遊撃に次ぐ地位で綠營兵を分擔指揮する）の徐南鵬から八月二十日にゴルカ兵はついにタシルンポに突入したという衝撃的な知らせが届いた。民衆は四散し、廟内には九人のラマが居るだけであった。二十一日にはゴルカは廟内に押し入り、そのラマたちを拷問して、財寶の在處を尋ねたが、知らないというので、自分たちで搜索して略奪を恣にした。廟内を莊嚴してある寶石や珊瑚、金銀などはすべて削り取って持ち去られた。略奪の限りを盡くした擧げ句、ゴルカ兵は九月七日になってタシルンポから退却していった。このタシルンポ略奪は、兄のチュンパホトクトに對する私怨からシャマルパがそのように仕組んだというふうに言われているが、あるいはそうであったかも知れない。なぜタシルンポまで来ておきながら、兵を引いたのかについては大いに疑問であるが、嘗てゴルカとチベットの間に交わされた合同に「もしチベットがこの合同をまもらない行いをすれば、ゴルカはタシルンポまで至って取り立て、それが濟めば返還する」という項目があるまさにその爲に、タシルンポまで来て略奪し、それが終わると歸っていったのである¹⁴。

さて四川總督鄂輝、成都將軍成徳は保泰からの連絡で事變の發生を聞いた。成徳は、事態の推移によっては、建昌鎮總兵の穆克登阿とともにチベットに向かうつもりであると上奏したが、事實風雲急を告げてきたために、八月二十二日に三百の兵を率いてチベットへ進發した。またしても戦争が始まったのである。ところがちょうどこの頃、北京の宮廷では巴忠の自殺というスキャンダラスな事件が

¹⁴ 『欽定廓爾喀紀略』（西藏學漢文文獻匯刻第一輯、北京、1992年）、386頁。また佐藤長『中世チベット史研究』637頁を参照。

起こった。

乾隆から保泰の上奏文の寫しを示された巴忠は、軍機大臣の前に出て「この事は我らの措置が善くなかったため、どうか私を革職あるいは降格させ、チベットに赴き全力で贖罪させていただきたい」と申し出た。乾隆はすでに鄂輝に出動を命じていたので、巴忠には命令を出さなかった。しかるに圖らずも巴忠はこの夜に潜かに抜け出して河に身を投げて死んだのである¹⁵。当時乾隆は熱河にいたが、その日は離宮を出て圍場で狩獵中で、駐留地はバヤンブルガスタイ（巴顔布爾噶蘇臺）大營であった。したがって巴忠が入水したのは、灤河の支流、イマートウ（伊瑪圖）河の上流であったと推定されている¹⁶。

ゴルカが再び侵入したことに對する巴忠の責任は重い。欽差大臣の大任を帯びながら、朝廷に裁可を仰ぐことなく専斷で無理な和平を主導した罪は到底免れるものではない。もとより進退窮まった上での自殺であった。

第二次戦争の推移

タシルンポが陥落し、略奪に逢ったことまでは上述した。その後、戦争はどのような推移をたどったであろうか。

先ず清朝の對應である。乾隆はすでに鄂輝、成徳をチベットに向かわせていたが、すぐに前線に到着するのは難しい。駐藏大臣の保泰、雅滿泰は信頼するに足りない。ゴルカはタシルンポから一旦退却したというから、ゴルカに對する討拔はあるいは雪解けを待って翌春になるかも知れぬ。ここは一つ落ち着いて本格的な布陣を敷く必要がありそうである。そこで乾隆は總指揮官として兩廣総督福康安の起用を決定し、九月二十五日に福康安に對し、速やかに北京に来るように敕諭を下した。また特に孫士毅を起用して糧秣など兵站一切を取り仕切らせることとし、場合によっては打箭爐で指揮するように言い含めた。

鄂輝はすでに九月十五日に打箭爐に着いている。彼は現地で兵を召集し、隊を分かって陸續進發させた。先發した成徳の兵を合わせると、合計七千五百餘の兵力となるはずである。たび重なるゴルカの侵入に對して、乾隆はこの際何としても徹底的に懲らしめねば止まないという氣持が強かった。その決心はソロン（索倫）、ダフル（達呼爾）の兵一千名を遠く滿州から動員したことにもよく現れている。彼らはこれまでも第一線で華々しい軍功を擧げてきた清朝の精銳部隊である。彼らは先ず北京に上り、青海ルートを通してチベットの戦場に向かうはずである。福康安も同じく青海を經由してチベットに行くことになり、九月二十九日

¹⁵『欽定廓爾喀紀略』（西藏學漢文文獻匯刻第一輯、北京、1992年）、56頁。

¹⁶佐藤長『中世チベット史研究』624頁。

に北京を出発した。清軍の陣容は福康安の總指揮のもとに、領隊大臣として海蘭察、台斐英阿、岱森保、烏什哈達、阿滿泰の五名が選ばれた。

その間、戦況はどうであったかといえば、ゴルカはタシルンポから撤退したものの、ランコル、ティンギェ（定結 Gting-skye）等を占領していた。それに對してチベット軍も奮戦して、九月二十八日にティンギェの官寨を襲い、防禦するゴルカ兵と戦闘を続け、やがてこの城寨の確保に成功した。嚴廷良もラツェ（拉孜 Lha-rtse）からティンギェに來援、その防備は強化された。

鄂輝はチベットへの道を急いでいた。九月十五日に打箭爐を出發し、十月十八日にはチャムドに着いた。十一月十二、十三日頃にはラサに到着豫定だという。しかしその行軍の速度は、乾隆にしてみれば緩慢に過ぎた。乾隆は鄂輝の四川總督職を罷免、副都統とし、同じく成徳もまた成都將軍の職を解かれ、副都統として、領隊大臣の指揮下に入るよう命ぜられた。それでも先ず成徳が十月二十六日にラサに到着、續いて鄂輝が十一月十四日にラサに着いた。その情報が傳わると、ゴルカはティンギェ方面から撤退を始めた。しかしニヤラム、キロン一帯はなお彼らの占領下に置かれている。

成徳はラサから前線に向い、十二月二十七日ニヤラムまで四十里のペルギェリン（拍甲嶺 'Phel-rgyas-gling）に着くと、翌日からここに總攻撃を仕掛け、寨を占領した。その功績により成徳は先の處分を取り消された。成徳はさらに進んで正月元旦からニヤラムの攻撃を開始し、翌日にはニヤラム官寨の東側寨房を陥した。その後も張芝元や鄂輝の率いる兵が續々援軍として加わるものの、敵の防備も極めて堅固なうえ、風雪が激しく、とりわけ西側の寨房は牆壁が高く火彈が届きにくいいため、容易には陥落しない。結局、清軍は二十四日になってようやくニヤラムの收復に成功した。成徳はその後キロンの收復を目指して、一旦ランコルに戻り、そこからゾンガに向かった。鄂輝のほうは乾隆の指示を受けて専ら軍糧の確保に任じ、ゾンガで成徳に合流することとした。

豫想外のことも幾つか發生した。駐藏大臣に任命されていた舒濂は、左遷されていた赴任地の回部からはるばる西寧を經由、さらに成都から四川ルートを通って、十二月七日ようやくラサに到着した。しかし旅中に病に罹った舒濂は、ラサ着後も回復することなく、十六日に逝去した。北京ではその後任の選任が議論され、鄂輝を登用する案も出たが、乾隆は寵臣和珅の弟和琳を拔擢することにし、和琳は日ならずチベットに向け出發した。

そうこうするうち乾隆五十七年（1792）正月二十日、福康安がようやくラサに到着した。到着後、福康安は帝に命ぜられた調査をすばやく處理すると、おもむろにゴルカ平定作戰に取りかかった。少ない兵力を分散して防禦に當てるのは得

策ではなく、ニヤラムに一定程度防備の兵を留める以外は、現在動員できる全兵力を集中してキロンを叩くことにした。頼みとする海蘭察の部隊も、ソロン、ダフル兵もまだ到着していないが、やがて合流するはずである。福康安は海蘭察に従者の数を減らしてでも急ぎラサに来るように命じ、海蘭察は二月十日にラサに着いた。ソロン、ダフルの兵も三百名を岱森保に選抜させ、やはりラサに急行させた。先に四川總督に任ぜられ、山東から徴用された惠齡は、すでに二月八日にラサに着いていた。ただ舒濂と同じく駐藏大臣として臺灣から呼び戻した奎林は、京師を出発して打箭爐からチベットへ向かったものの、臺灣で感染したもののか、濕氣から来る病気で、髪が生え際に腫れ物ができ、手足を動かすのもやや不自由になっていた。それでも遅れてはならじと前進を續けるが、腫れは引かず發熱がはじまり、食欲も減退してきたので、ついにギャンカ（江卡）¹⁷で休息を餘儀なくされた。打箭爐で兵站を指揮する孫士毅は醫師を送って治療に当たさせたが、藥石效なく奎林はチベットに着く前、三月九日にこの地であえなく死亡してしまった。當初豫定していた征討軍指揮官の一角が失われたかたちで、これは乾隆にとっては大きな誤算であった。

失地回復からネパール侵攻へ

まだ豫定の軍勢がすべて勢揃いしたわけではないが、ほぼ陣容が整ったと見るや、乾隆五十七年二月十七日、福康安は滿を持してラサを出發、同月の二十七日にタシルンポに到着した。三月十五日、福康安は大將軍に昇格し、その權威をもって遠征軍をひきいることとなった。福康安はさらに四川兵三千を追加することを要請し、認められた。その動員の差配にはもっぱら孫士毅が当たった。これらの兵が加われば、福康安の率いる軍の總勢は一萬二千を越える大部隊となるはずである。

この作戦の大目標はキロン一路であり、この方面に福康安、惠齡、海蘭察の統率する大軍を集中し、成徳と台斐英阿はニヤラムに兵を留めて防備に当たること、キロンを抜いた後は、一舉敵地に攻め入りカトマンドゥを目指す、このような戦略が乾隆の指示によって定められた。兵站については、和琳がラサで監督に当たり、鄂輝が前線と往來して處理することに決定され、キロンより先については、惠齡がその責任を負うものとされた。和琳は閏四月十三日ようやくラサに到着した。軍の進路については鄂輝が前もって探索しておいたルートが採用され、タシルンポ→ラツェ→チャンガムリン（昂哩喇嘛寺 Byang ngam ring）¹⁸→ゾンガを行くことになった。

¹⁷現在のチベット昌都地區芒康（Smar-khams）縣に當たる。

¹⁸今日のチベット、シガツェ地區昂仁縣。

後続部隊が續々とチベットに到着したのを承け、二た月以上もタシルンポに腰を落ち着けていた福康安は、いよいよ前線に向かって進發すべく、まず海蘭察とともに視察に出た。彼らは閏四月二十五日にラツェ、二十七日にランコルに至り、そこからニヤラム、ロンシャル（絨斜 Rong-shar）方面を視察した。その結果、ロンシャル方面は險路で、道は塞がれ、ここに兵を投入するほどのことはない。ニヤラム方面には成徳、岱森保、永徳、穆克登阿に三千の兵を與え、支隊として作戦を遂行することとし、本隊はやはりキロンを目指すことにした。当初の作戦通りである。

視察から歸ると、福康安はゾンガに行き、そこからキロンに向けて進發した。雪はようやく消えているとはいえ、山道は聞きしにまさる峻險さで、谷川には水が漲り、石にぶつかって奔騰している。斷崖のへりに辛うじて續く道は、狭いところは幅一尺にも満たず、馬を牽いてそこを通過しようというのであるから、その困難は想像に餘りある。このような惡路を辿って幾つもの山を越え、五月六日に轄布基というところに至った。ここは擦木から數十里のところである。

さてここに至って福康安の軍は初めて敵と干戈を交えることになった。我々の戦圖に描かれる場面もここから始まる。以下、戦圖に沿って戦いの進展を見ていくことにしよう¹⁹。

目前の擦木の地形はと言えば、兩側に急峻な山がそびえるその間に山の尾根が横たわり、ゴルカの要塞は尾根の最も高いところに築かれている。高所に陣取る敵にはこちらの動靜は手に取るように見える。そのため夜戦を仕掛けるしか手はない。その夜はたまたま雨がざあざあと降っていたが、闇に乗じて軍を進めた。福康安は兵を五隊に分ち、二隊を東西の山から擦木の要塞の左右にむけ側面攻撃を仕掛け、さらに二隊を東西の山梁を迂回して敵の背後の退路を斷つことにし、海蘭察の率いる一隊が正面攻撃を仕掛ける、福康安は台斐英阿、徳楞泰らを引き連れ遊軍として戦い、惠齡は張芝元らとともに補給を擔當する、そのように申し合わせた。翌五月七日の黎明、擦木の要塞はすでに指呼の間であった。擦木は前後に石造りの要塞が二つあり、大きな河がそれらを圍むように流れている。河に臨んだ三方には石積みの牆壁が設けられ、高さは二丈ほどもある。要塞への通路は北側の一つだけである。福康安は各隊に命じ、素早く山を登り、見つからぬように牆壁のそばまで進み、攻撃を加えさせた。牆壁を乗り越え、門が開かれると、官兵はそこからなだれ込み、箭を射るもの、槍を揮るもの、瞬く間にゴルカ兵を百餘名を打ち倒した。これで手前の要塞が陥落したが、奥にある要塞は一層堅固である。高い崖の上に位置し、内外を二重の牆壁で圍んであり、すべて石を積ん

¹⁹戦圖の描寫は概して『欽定廓爾喀紀略』により、『清高宗十全武功研究』『中世チベット史研究』を参照した。

で造っており、上部には銃眼を設け、壁には一面に削った木を差し込んで侵入を防いでいる。福康安は先ず西面の兵に攻撃を仕掛けさせ、東面が手薄になったところを、牆壁下部の石を取り除いて突入し、敵の頭目ジャマダルトゥラム（咱瑪達杜拉爾木 Jamadar Tularam）等三名、兵九十餘名を殺し、十八名を生捕りにした。こうして敵の最初の要塞は完全に陥落した。【第一圖】

翌日の五月八日、福康安は勢いに乗じて、瑪噶爾轄爾甲に軍を進めた。ここも險阻な地形で、後ろに山を背負い、前面は鬱蒼と木が茂った密林のような場所で、道が錯綜している。ゴルカの兵三百餘名がキロンの方角から密林に沿って山麓に展開したので、巴圖魯侍衛章京がそれを各個撃破しようとしたところ、ゴルカ兵も山麓から突進してきた。ゴルカは數十名が討ち取られたが、なおも後から後から兵を繰り出し、刀を手に打って出てくる。福康安は兵を山の向こう側の崖下に回り込ませておき、ゴルカ兵が紅旗を押し立てて突撃してくるのを、福康安は兵を率いて側面から攻撃し、敵の頭目から紅旗を奪い取った。山梁に展開した兵たちも巴圖魯侍衛章京も同時に押し出し、槍と弓とで打ちかけると、ゴルカはついに支えきれず逃走した。敵の逃げ足は早く、味方の馬匹は連日の山路に疲労困憊していたので、十里ばかり追撃するのが精一杯であった。ゴルカ兵はそれでも逃げながら銃を放って反撃し、溝の向こうに逃げ込んで必死に抵抗したので、官兵は溝を乗り越えて多くの敵を撃滅した。残兵二十名ばかりがキロンへ逃れ去った。官兵はその日幫杏に宿營した。敵の頭目七名、兵二百三十餘名を殲滅、敵の軍旗二面及び無数の銃を鹵獲、三十餘名の敵兵を捕虜としたことがこの日の戦果であった。【第二圖】

福康安がキロンの情勢を探ってみると、その官寨はいかにも高大であり、周りを二丈ほどの石の牆壁が取り囲み、壁にはやはり削った木を差込んで防備を固めてある。さらに西北の河に臨んだところに一つ、東北の岩の上に一つ、さらに東南の險阻な山に寄り添うように一つ、合計三つの石礮が設けられてある。西北の石礮は河から水を取り込めるようになっている。福康安は五月十日の午前二時ごろに隊を分かって攻撃を開始した。哲森保らが東南山梁の石礮に殺到すると、ゴルカも必死に打って出る、そこへ海蘭察が台斐英阿を引き連れて突撃し、東北の山梁を占據した。蒙興保も山裾にあるラマ寺院を奪取した。巴彥泰が河に面した石礮に攻め寄せると、ゴルカは水道が断たれるのを恐れて必死に防戦する。そこへ山梁を占據した官兵が援軍に駆けつけ、石礮めがけて大砲を浴びせかける。ゴルカは我先に河に飛び込み逃がれるが、大抵は溺れ死に、岸にたどり着いてもソロン騎兵の餌食となった。東北の石礮がもっとも官寨の中樞に近い。そこを桑吉斯塔爾が兵を率いて攻撃、火弾を投げ込んで、防壁を攀じ登ろうとするが、石の

壁は切り立って滑りやすく、ゴルカ兵も猛烈に銃を打ってくる。官兵は登ろうとしては撤退を繰り返す。ようやく日暮時分になって、火の手がまわり、石礮下部が焼け落ちて、ここのゴルカはほとんど全滅した。珠爾杭阿は官寨を目指して突進、連続して波状攻撃を仕掛けるが、敵もさるもの易々とは行かない。官兵は火を放って寨下の建物を焼きはらい、その勢いに乗じて兵を進めると、ゴルカ兵はさらに奥の寨に退却し、銃を放ち石を投げ最後の抵抗を試みる。福康安は各路の官兵を呼び集め、一齊攻撃の命令を下し、占據した石礮に砲臺を据え、官寨目がけて砲撃する。また大木で梯子を掛け、そこから續々兵を送り込み、官寨を圍む石の堡壘は取り除かれた。ゴルカ兵は西南の崖沿いに山のほうに逃げようとするが、残らず官兵に討ち取られた。深夜午前二時に始まった戦闘はすでに日も暮れ果てた午後十時、丸一日の長い戦いは終わり、ついにキロンは奪回された。この戦いでは、敵を斃すこと六百四十七名、大小頭目は七名を数えたが、これは首の數だけで、河で溺死したり、首級を擧げるに及ばなかったものは含まれない。さらに生捕りにしたものの百二十三名、殘黨狩りで捕獲したものの七十五名などであった。【第三圖】

キロンを五月十三日に發程した福康安の軍は、八十里先の熱索橋（Rasuwa）を目指した。切り立った山路を進み、難澁しながら十四日の黎明には擺嗎奈撒という地に到着した。熱索橋はここからまだ十里の道程である。先には東から西に河が流れ、そこに板を渡した橋が架かっている、そこを渡るとゴルカの領域である。ゴルカは北岸三、四里ばかりの索喇拉山に砦を構えていたが、巴圖魯とソロン兵がそこを攻撃すると、敵は持ちこたえられず、熱索橋から南岸に逃走しようとした。官兵がすぐ後ろから追ってくるのを見て、南岸のゴルカ守備兵が慌てて橋を破壊したので、ゴルカ兵は河に落ちて溺死した。清軍は木を伐って橋を架けようとしたが、河幅が広い上に流れも速く、くわえて敵が銃撃を加えてくるのでなかなか渡河することが出来ない。そこで五月十五日の未明、福康安は正面攻撃するかと見せかけ、ひそかに阿滿泰、哲森保らに命じて、東側の峨綠山から二つ山を越えて熱索橋の上流、橋から六、七里の地點に出、そこで大木を伐り倒して筏を作り、南岸に渡らせた。そのまま敵の南岸要塞目がけて突進すると、正面の官兵もその隙を縫って橋を架けて渡河に成功、またたく間に南岸の要塞を二つともに攻略した。ゴルカの守備兵は武器を捨てて逃げまどい、折り重なって、河に落ちていった。【第四圖】

熱索橋を占領した清軍はさらに前進して、五月十七日に密哩頂、十八日に旺噶爾に至った。道は相変わらず險阻で行軍には難澁したが、一方敵の姿も一向に見えなかった。十九日に協布嚕というところまでくると、そこには河が流れ、もと

あった橋はすでに取りはらわれていた。南岸の高所にゴルカが木城を築いて牆壁をめぐらし、道を塞いでいる。木城の西南一里のところは協布嚕で、河に沿って砦が作られている。協布嚕の克瑪山の東三十里にも河の上流に數ヶ所の寨がある。その中で克堆寨は山あいの岩の上にあつて、もっとも急峻、兵の數もはなはだ多い。二十日、福康安は兵を率いて北岸の旺堆に至り、巨木を切り倒して橋を架けようとしたが、ゴルカは高所の木城から銃を打ちかけてくるので、橋を架けることができない。福康安は官兵に山の上から砲撃させたが、木城の牆壁は破壊してもすぐに修理してしまう。五月二十一日、再度架橋を試みるも失敗。翌日、惠齡と額爾登阿が正面から敵を牽制しているあいだに、福康安と海蘭察は克堆寨を攻略しようとした。二十三日の夜明け、幾つも山越えてようやく河の上流の北岸に出た。そこに枯木で橋を架けようとするが、河幅が廣いうえに、連日の雨で水嵩が増し、急流になっている。ゴルカ兵も對岸から撃ってくるので、何度も渡河に失敗した。日が暮れて大雨になった。福康安は撤兵すると見せかけ、岩陰の林の中に兵を伏せておき、夜中になった頃合いを見計らい、巨木をロープで縛り合わせ、それに縋って河を渡った。桑吉斯塔爾に橋の見張りを命じ、その他の兵を三路に分けて敵に当たることにした。かくして五月二十四日の明け方、敵の不意を突いて、各路同時に攻撃を開始すると、ゴルカ兵は支えきれず、三百名が殺され、五ヶ所の寨が焼き拂われた。台斐英爾の率いる一隊も薩木那から山を越えて戦闘に参加したので、敵の守備兵は算を亂して逃れ、二百名が官兵に殺された。こうして協布嚕は奪取され、正面の旺堆にいた官兵もこの間に河を渡って、敵の砦を占據した。【第五圖】

ついで更に南進する清軍が向かったのは協布嚕から百十里ほどの噶多である。噶多から正路を通って二十餘里行き作木克拉巴載の山梁を越えると、山下に河があり、その南岸が東覺大山で、ゴルカの一大據點になっている。噶多の東南にある雅爾賽拉、博爾東拉の山々には間道があり、そこを通ってゴルカ兵が東覺山と連絡しあっている。海蘭察は配下の兵を三路に分けて、雅爾賽拉、博爾東拉の山々に進攻させることにし、六月三日進發の號令を發した。東覺方面を目指す部隊は同じ日に福康安みずから兵を率いて進發した。ゴルカは東覺山の頂の處々に寨を設け、山腹には木城や石の堡壘が林立し、行く手を塞いでいる。福康安は額爾登保らを引き連れて、險阻な山道をひそかに噶多普方面に迂回すること二日、五日の夜明けに山腹に至った。河に面した堡壘の守備兵が官兵を見つけると、堡壘を出て發砲してきた。官兵は身を隠しつつ進み、六日、山麓に下って渡河すると、敵兵はみな砦を出て懸命に防禦する。すぐさま官兵を率いて猛攻を加え、河に沿った堡壘を逐次奪取する。その上の高所にはまだ木城があり、石を積んだ堡壘が多

數並んでいる。敵は河に沿った堡壘が陥ちたのを見て、盛んに上から攻撃を加えてくる。激しい白兵戦が展開されたが、そのうちに官兵が敵の頭目を生捕りにすると、敵は退却を開始する。すかさず兵を勵まし、最初の木城に攻めかかる。手負いの傷も何のその、兵は少しも退かず、たちどころに第二、第三の木城を攻め落とした。ゴルカ兵はラッパを鳴らして體勢を整えるや、またもや高所から攻めかかる。官兵は怯むことなく奮戦し、火器を用いることもなく、弓矢と矛刀で敵を打ち倒した。台斐英爾の一隊は山梁から連日敵に砲撃を加えていたが、福康安の本隊がすでに噶多普から渡河して勝利したと聞き、山を下りて正面から橋を架けて本隊と合流した。この日の戦いで、敵の砦を打ち破ること數知れず、敵の頭目蘇必達奈新 (Subedar Narsingh)²⁰、蘇必達巴撒喀爾 (Subedar Bhaskara) はじめ四百餘名を討ち果たしたほか、河に落ちて死んだ敵兵は數知れない。また大頭目の薩爾達爾巴載巴拉哩 (Sardar Partha Bhandari) を捕虜とした。一方、雅爾賽拉、博爾東拉に向かった海蘭察の別働隊は、險阻な山と密生する竹に阻まれ、進軍ままならぬ状態であったが、前方に木城三座、石堡七所を發見したので、六月六日未明に山頂から迂回してこれを攻撃した。早朝から晝まで激戦を展開、ゴルカを敗走させ、その後本隊に合流した。【第六圖】

六月九日、福康安等の清軍は雍鴉 (Archalay)²¹に至った。連日の山を越えての戦闘に、清軍の將兵は疲勞の極に達していた。食糧として携帯したツアンパも食べ盡くしていた。ここでしばしの休養を取ることは避けられなかった。ところが六月十五日になって、ゴルカが去年ニヤラムで捕虜とした中から、兵士王剛ら四人を送り返してきた。彼らはゴルカ王からの書信、福康安に宛てた一通と官員官兵に宛てた一通とをもたらした。その内容は、ゴルカはもとチベットとは和親していたのに、先にチベットの兵士やカロンを執えたり、タシルンボを略奪したりしたのは皆シャマルパに唆されたもので、先の檄にしたがって彼を捕縛して差し出すつもりでありましたが、彼は五月十五日すでに病死いたしました。そこでいま王剛らを送り返し、大皇帝の恩赦を懇願するものです。もしお許しいただけば、さらに大頭人を軍營に派遣し、福將軍の指示を待って、すべてそれに遵いたいとのことであった。福康安はその言辭には疑いを持っていたが、やがて六月二十五日にゴルカの使者として噶布黨普都爾幫里 (Kaptan Bhotu Pande)、噶箕朗穆几爾幫里 (Kazi Ranjit Pande) たちが來たり、兵士盧獻麟、馮大成、テンジンペンジョル等、十四名を送り返してきた。この時、ゴルカは降伏の請願書を攜えていたので、福康安は國王自らがやって來て、前面のゴルカ軍を撤退させることが条件だとし

²⁰以下、ゴルカ人名の比定は佐藤『中世チベット史研究』680頁以下に據る。ただし佐藤も各人名の後にクエスチョンマークを付して、必ずしも確實とは言えない。

²¹雍鴉を Archalay に比定するのは佐藤『中世チベット史研究』に據った。その681頁。

て使者を送り返した。しかしその返事はなかった。返事がなく、前面の敵も撤退する気配がないので、福康安は再び兵を進めることとした。チベットの冬は早い。早く決着をつけないと、歸路が雪で閉ざされてしまう心配がある。

清軍は七月二日に雍鴉を出發、兵を左右兩路に分ち前進した。前面の噶勒拉山の頂にはゴルカが二座の木城を構えていたが、敵はすぐには向かってこなかった。正面では福康安は道を探しているように見せかけ、分散して兵を進ませた。敵は高所から猛烈に攻撃してきたが、すでに左右兩路の軍は樹林を迂回して高みに出、敵の東西の木城を衝いたので、ゴルカの陣營は大混亂に陥った。さらに正面から福康安の兵がやって来るので、敵は三方ともに圍まれた状態である。敵の反撃もすさまじく、清軍は少なからず犠牲を強いられたが、怯まず前進し、木城に火弾を投げ込んで、これを攻略した。ゴルカはこの戦闘で頭目五名、兵三百名を失った。清軍はそのまま前進して、堆補木（ダイブン Dhaibung）山口の象巴宗に至った。ここにもゴルカの堡壘があり、山上には二座の木城、そばには石の堡壘が二つ三つ造られていたが、清軍はこれらを攻略し、敵兵百餘を殺した。福康安はそのまま山下の帕朗古（ベトラヴァティ Betravati）に進んだ。七月三日の早朝である。ここには河が流れ、橋が架かっている。両側に橋座があつてゴルカ兵が嚴重に守っているが、この橋を奪取しないと、敵はこの橋から北上し、清軍の背後にまわる可能性がある。そこで福康安は兵を二路に分ち、珠爾杭阿、安祿、七十五、蒙興保、穆克登阿らを東へ河の上流から集木集方面に進ませ、阿滿泰、額爾登保、袁國璜、阿木爾塔らは帕朗古の橋を攻め、一擧に甲爾古拉を衝かせることにした。

北側の橋座は朝八時から銃を中心に攻撃し、懸命に抵抗する敵を撃退、正午までかかってようやくこれを奪取した。南岸の抵抗はさらに激しく、敵はしきりに銃で應戦しながら、橋を破壊し渡らせまいとする。そこを阿滿泰らが突進し、一氣に橋を渡りきり、南岸の橋座を攻略、ゴルカの頭目三名、兵百名餘を倒し、敵が山を目指して逃れるのを甲爾古拉まで追撃した。しかし橋を強行突破する際、阿滿泰は敵の銃弾を浴び、河に落ちて戦死した。上流に向かった珠爾杭阿たちも正面の軍がすでに渡河したのを見て、橋を架け渡河、集木集に進攻した。その頃、強い雨が降り始め、滑りやすくなった山道をなおも二十里ばかり前進し、木城まで近づいたころには、道は益々険しくなり、多數のゴルカ兵が高所から鐵砲を打ちかける。官兵は應戦するものの身を隠す場所もない。一旦兵を引こうとするところへ、敵はさらに襲いかかる。巴圖魯侍衛章京と官兵は全力で戦い、白兵戦のすえ多數の敵を斃した。集木集の戰場でも苦戦が強いられた。山上のゴルカ兵のほかにも、横道から敵の援軍が繰り出し、河の下流からも鐵砲を打ってくる。敵の數は多く、七、八千もあるかと思われた。福康安は台斐英阿、張芝元、德楞泰、七

十五らを率いて、戦場を駆け回った。激戦は二日一晩繰り広げられ、双方とも大きな犠牲を出した。この戦いで、ゴルカの頭目十三名、兵六百餘が死に、清軍のほうも台斐英阿をはじめ多数が陣歿した。清朝側の記録にはそうは書かれていないが、この戦闘では清軍が勝利したとは到底言えない。ゴルカの首都カトマンドウを目前にしなが、清軍はこれ以上進撃することが出来なくなった。【第七圖】

七月八日、福康安はゴルカ王の書信を受け取ったが、そこには次のような媾和の条件が記されていた。先ずタシルンポの什物を返還し、大小の契約書を返却する、そしてシャマルパの遺骨と彼の弟子、従僕、財産を獻呈する、というのである。しかし國王ラナバハドウルシャー、攝政のバハドルシャー自身がやって来るという件は、ただ婉曲に恐れ入ったということが書いてあるだけで、明確な回答はしていない。福康安はすぐには媾和に進むことはしなかったものの、清軍の力量も限界に近いことは分かっていた。ゴルカ側としても、バハドルシャーに反対する勢力がいて、今回の戦争にも異論がなかったわけではない。さらなる戦争の継続は難しくなっていた。

七月十七日、ゴルカの使者バルバドラカワス(巴拉巴都爾哈瓦斯 Balbhadra Khawas)が来て、先に約束された大小契約書二通、シャマルパの遺骨、弟子、従僕、財物などを引き渡した。タシルンポの略奪品も一部が返還された。残りは搜索の上、後日すべてを返還するという。ついで八月二十七日に、小頭目塔曼薩野(Taman sahi)が来て、タシルンポの什物の残りを返還した。それを承けて、福康安は海蘭察、惠齡と連署して、乾隆に對し休戦と媾和をもとめる奏上を行った。乾隆はその請願を許し、また年内あるいは正月十五日の元宵節以前にゴルカの朝貢使が北京に到着できるように希望した。そうすれば朝鮮、暹羅などの國々の使節の後に随って、一緒に謁見することができる。

八月八日、大頭目カジ・デウダットタパ(噶箕第烏達特塔巴 Kaji Devadat thapa)ら四名の朝貢使が、表文を持ってやって来た。彼らは樂工、馴象、孔雀、珊瑚、金銀絲緞、鎗刀、藥材など二十九種の貢品を攜えて、福康安に代奏を求めたのである。デウダットタパは地に伏して懇願し、叩頭して涙ながらに命乞いをした。ゴルカの王はなお幼く無知であり、バハドウルシャーは見識を缺いて天朝の法を知らず、シャマルパの教唆によって、チベットと事を構えることとなってしまいました。もし大皇帝陛下のお許しを蒙り、ゴルカ全部落の土地、人民が誅滅を免れるならば、二度と事を滋くするようなことは致しませんと、ひたすら恭順の意を示した。また朝貢については、天朝に服屬したからには、毎年朝貢すべきところ、路程があまりにも遠いので、五年ごとにカジ一名を派遣することにさせていただきたいという。こうして福康安はゴルカの降伏を受け入れ、乾隆はそれを裁可し

た。八月二十一日、福康安らの清軍は帕朗古からの撤兵を開始するとともに、珠爾杭阿らがゴルカの朝貢使節を送って行った。彼らは九月三日にキロンを發程、十二月二十三日に北京に到着、同日和珅に謁見し、その翌日、西苑門外で乾隆に朝覲した。さらに三日後、重華宮での朝覲の際には、改めてラナバハドウルシャーに王爵、バハドルシャーに公爵の位が授けられた。【第八圖】は西苑門外における朝覲の様を描いたものであろう。

戦圖と銅版畫の製作

乾隆はこれまでの例にならって、様々なやり方で戦勝を記念した。

今回の勝利によって、ちょうど十回の外征にすべて勝利を収めたという、いわゆる十全武功を自祝するため、この年、乾隆五十七年十月に、みずから「十全記」を執筆した。すなわち準部の平定が二回、回部の平定が一回、二度にわたる大小金川の役、さらに臺灣、^{ビルマ}緬甸、安南、それにこの第一次、第二次廓爾喀戦役がそれであり、乾隆が即位して以来の戦勝を数え上げたのである。この御製文は滿、漢、モンゴル、チベットの四種の文字で石に刻まれ、福康安によってラサのポタラ宮の前に安置された²²。高さ四メートルを越えるこの巨碑は、現在も同じ場所に立っている。

また今回の戦役で功績のあった功臣三十名の肖像を描かせ、紫光閣に掲げさせた。功臣圖の作成は、西域、兩金川、臺灣の平定について四度目のことである²³。乾隆は前十五名の圖像に自ら贊を附し、後十五名の圖像には儒臣に命じて贊を作らせた。西域、金川の功臣圖が百名の多數に及び、臺灣でも計五十名なのに比べて、ゴルカの功臣数が少ないのは、平定に時間がかからず、戦場となった土地は險阻だが、実際には廣い範圍に及んでいないためだと乾隆自身は説明する²⁴。

戦争の各場面を圖に描かせ、それを銅版畫に刷らせたのも、これまでの例に倣ったものである。造辦處の檔案によって、戦圖と銅版畫作成の経過を辿ってみよう。乾隆五十八年三月三日に筆帖式の百福が銅板處に持ってきた題頭單には、御前大臣の福（福長安?）による二月三十日付けの指令書が残っている。それによると、現在「平定廓爾喀戦圖」八枚を如意館で起稿させており、出來あがるごとに銅板處に廻すので、下繪（清圖）を作成して、臺灣、安南戦圖の例に倣って銅版畫を作成

²² 『高宗實錄』卷 1419（乾隆五十七年十二月下）、中華書局影印本『清實錄』第 26 冊、1098-99 頁。

²³ これら功臣圖は、現在ドイツ、ロシア、アメリカなどに計 30 點ほどが現存するが、すべて西域、金川、臺灣のもので、残念ながらこれまでのところ廓爾喀功臣圖は一點も見つかっていない。

²⁴ 「平定廓爾喀十五功臣圖贊有序」。いま『欽定廓爾喀紀略』（北京、1992 年）所収のテキストによる。その 45 頁。

するようにとある。さらにその下に、十一月十八日に出来上がった廓爾喀の第一、第二の下繪二枚を、原稿と共に固倫額駙豐（豐紳殷徳）と總管大臣伊（伊齡阿）のもとに届ける、とある²⁵。伊齡阿は造辦處を管轄する内務府の大臣であり、いま一人の豐紳殷徳は和坤の子で、乾隆の十女固倫和孝公主と結婚していた。この當時はおそらく御前大臣であったが、やがて内務府大臣になるはずで、すでに銅版畫の作成に多少關與していたものであろう。また五月二十一日に同じく筆帖式の百福が持ってきた報單には、四月二十一日付けの太監鄂魯里の傳旨が記され、廓爾喀戰圖が刊刻された時には、二百三十九部を印刷し、そのうち五十二冊を圖冊に作り、二十四分を匣はこに入れるようにとの指示がなされている²⁶。さらに乾隆五十九年十一月一日に、員外郎の祥紹から銅板處に交付された旨意貼には、同年九月二十四日付けの太監鄂魯里の傳旨が見え、そこには東西北三路の行宮及び南苑の四宮に配置される圖繪の表装に關する命令が細かに記されていて、その中に「安南、廓爾喀の冊頁が出来たときには、五冊を一纏めにせよ」との指示がある²⁷。これらを総合すると、廓爾喀戰圖の銅版畫は、乾隆五十八年の春にはまだ如意館で原畫を描いている段階であり、銅板處で作成する銅版の下繪は、十一月十八日に、八枚のうちようやく二枚が出来上がったただけであった。その後、仕事は一定の進捗を見たはずだが、銅版畫全部が何時完成したかは分からない。ただ翌乾隆五十九年の九月時點では、たとえ銅版畫がすべて完成していたとしても、少なくともまだ畫冊の形にはなっていなかったことがわかる。

廓爾喀戰圖について、やはり檔案中に興味深い言及があるので、最後にそれを見ておきたい。それは乾隆五十八年四月五日に如意館が受理した員外郎の福慶からの押帖で、それによると二月三十日に太監の厄勒里が廓爾喀得勝戰圖七張を如意館に交付するので、如意館の畫家、莊豫徳、馮寧、伊蘭泰、清柱に、七張の戰圖をそのまま大圖一張に描き直させるようにとの指示であった。先ず小さな畫稿を御覽に呈し、許可が出れば、それを擴大して大圖とすること。紫光閣の後殿の西間北牆の大きさに合わせよということで、そのサイズは高さ一丈二寸、幅一丈二尺五寸と指定された（約3.4x4.2m）²⁸。

ドイツのハンブルグ民族博物館に、かつて紫光閣に掲げられていた西域戰圖のうち「フルマン戰勝圖」の彩色大圖の右半が所藏されていることはよく知られているが、いまここに言う廓爾喀戰圖も同じく紫光閣に掲げられたものである。その違いは、先ず西域戰圖が銅版畫と同じく、十六枚からなるシリーズであるのに

²⁵ 中國第一歷史檔案館、香港中文大學文物館合編『清宮内務府造辦處檔案總匯』（人民出版社、2005年）、第53冊、658頁。

²⁶ 同上、第54冊、372-373頁。

²⁷ 同上、第54冊、370頁。

²⁸ 同上、第53冊、615頁

對し、廓爾喀大圖は七枚の戦闘畫面すべてを一枚に描き込んだものだという點であろう。廓爾喀戦圖は八枚からなるが、最後の北京における朝覲圖は戦闘畫面ではないので省かれたらしい。また西域戦圖は大圖を縮小して銅版畫の下繪としたと考えられるのに對し、廓爾喀戦圖の場合は反對に小圖七枚から大圖一枚を作成したわけで、順序が逆になっている。サイズも若干小さいように思われるが、これは紫光閣の壁面のサイズが一定していなかったためであろう。いずれにせよ残念ながら廓爾喀戦圖の大圖はすでに失われてしまったらしい。またこれも残念なことだが、七枚の圖から一枚の大圖に仕上げた畫家の名前は知られるものの、最初の原圖の作者を知ることは出来ない。